

退行する日本人の倫理性 - いま我々が為すべきことはなにか -

海野 裕 (倫理研究所客員研究員)

はじめに

日本人の倫理意識がどのような状況にあるのかをつぶさに調べそれを俯瞰する。そのために25の倫理コンセプト(以後「倫理25」と呼ぶ)を設定し、その共感性を大サンプルによって定量的に評価する。それが「倫理意識調査」の枠組みである。社団法人倫理研究所はこの画期的な調査プロジェクトを立ち上げて2005年に第一回の調査を行い、5年後の2010年に第二回の調査を行った。今後も定点的な観測を行い、日本人の倫理意識の変遷を把握していく予定である。2005年の第一回調査では、「倫理25」の保存状況を明らかにした。いままで誰も数量化していなかった日本人の倫理意識がはじめてデータとして計量されたのである。第一回調査のハイライトは「祖先や神仏を大切にすること」の倫理が喪失の危機にあり、またそれが日本人全体の倫理性の低下を引き起こす原因となっているのではないか、という提言にあった。

今回2時点の調査データを得たことで、我々は日本人の倫理意識がどのように「変化」しているのかを把握することができた。予想されたこととはいえ、調査結果は「倫理25」の個人的共感度、社会的重要度の低下を冷徹に示している。日本人の倫理性はこの5年間で退行しているのである。我々はこの事実を受け止める必要がある。そのうえで何を考え、どう動くのか。それが求められている。

この小論では上記のような問題意識をベースに日本人の倫理意識の変化とその背景要因について分析したうえで状況の改善の道筋について考察している。詳細は本論に譲るとして、筆者は「日本人の倫理性の低下について日本人の倫理性そのものを問題とする」という立場は取らない。倫理道徳や秩序の崩壊を話題にする場合、これを嘆息し日本人の精神性の劣化にその原因を求める論説が一般的である。しかしこれは極めて自己撞着的な論理ではないだろうか。これでは「倫理性が低下しているから倫理的になるべきだ」と言っているに過ぎない。このような論理が生まれる背景には「倫理的であるか否かはその人の人格或いは資質に因っている」という固定概念があるのだと思う。倫理的であるためには自分を強く律することが必要だ、という具合である。しかし倫理とは本来共同体の規範のことであり、共同体のあり方すなわち環境と不可分な概念である。共同体の構成員が倫理的であるためには、共同体自身がそれに相応しい構造を持っている必要があるのだ。さて我々が属する共同体、日本の設計は果たして

うまくできているだろうか。上手に運営できているだろうか。日本人が倫理性を高く保つためには、今までの論説のように責任をひとりひとりに単純還元するだけでは不十分である。ひとりひとりが倫理的でいられるような共同体の再構築とあわせて考える必要がある。

こうした論考が可能になったのも、この極めて有意義な定量調査が実施されているからこそである。その意味で社団法人倫理研究所の果たしている役割は極めて大きい。筆者は今後ともこの調査結果がより広く周知されることを願うものである。

注) 本論の中で多用する次の単語について筆者は以下のような概念規定を行っているのご確認願いたい。

倫理：共同体で共有している規範

倫理意識：調査の対象となっている日本人の「倫理」に関する共感などの意識全般

倫理観：倫理の中のある一定の意味合いを持つ価値の集合

倫理性：倫理を維持強化しようとする性向、或いは倫理を高いレベルで遵守する性向